中学国語

教えて考えさせる古典の授業

静岡県藤枝市立青島北中学校
朝比奈　義典

思考力を育てる課題を設定する

子どもは考えることが好きである。日々実践していてそう感じる。ただそれは、「あれ？どうして？」と子ども自身が感じたときであり、また、それを考えることでどんな力を養うことができるか、が明確な場合である。授業には教師のねらいがあるのは当然のことであるが、思考力を育てるには、これらを念頭に置いて課題を設定する必要がある。

例えば、二年生の古典教材『徒然草』第百九段（「高名の木登り」の段）を、主語を補いながら読む力を養うことをねらった授業として扱う際に、「高名の木登りは誰と会話をしているのだろう」と聞くと、生徒の多くは「文章中に登場する木登り名人とその弟子と思われる人物との会話」と答える。このような読みのつまずきが見られたときには、教師が機を逸することなく生徒に働きかけることによって、生徒が自然と考えたくなる課題が設定されることになる。

思考するための知識や手だては教える

「よく読みなさい」「しっかり考えなさい」という教師の指示は、子どもにとって何の役にも立たない。考えるために必要な知識や手だてはしっかり子どもに持たせてやりたい。

前述の授業であれば、「候」「侍り」といったことばが敬語であるという知識を与えておく（あるいは呼び覚ます）。そのうえで主語を考えさせることで、名人が弟子に対して敬語で話すことはあり得ないことに気づかせ、名人の会話の相手に気づかせることにもつながっていく。

また、課題解決に向けては、筆者である兼好や「蹴鞠」に関する知識、随筆という文章の特徴、さらには、それらを関わらせて考えることも、きちんと教えておく必要がある。

思考するための時間を十分確保する

教師が解答を急がせては、子どもの思考を育てることはできない。一人でじっくりと思考する時間、少人数グループで意見交換する時間など、十分に時間をかけて思考させたい。

その結果、やがて子どもは、名人と兼好自身との会話であることに気づき、教えられた知識やそれらを関連づけて考えることの重要性をも認識するようになるのである。

あさひな　よしのり　静岡県藤枝市立青島北中学校教諭。現在、静岡県教育委員会指定「確かな学力」育成支援事業協力校の一員として、その実践に取り組んでいる。